

第105回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

現在の様子と今後の課題

このような経過をたどる中、Tさんの高校卒業後は就職希望でした。そのTさんが、大学進学に意欲を見せるようになってきているのです。入学当初は、大学に興味はあったものの、字の読み書きが苦手ということで、進学は無理と諦めていたのですが、ICT等の活用で得られた自信が学習に対する意欲、諦めていたことへのチャレンジにつながっているのではないかと考えられます。今後もTさんの夢実現に向けて、配慮や学習方法を模索しなければならないと学校は考えているようです。

現在検討していることの一つに、タイピング練習があります。前例として、高等学校や大学の受験時の配慮で、ディスレクシアがある生徒に対してパソコンでの解答を認めている事例があります。神奈川県の実例です。Tさんは書くことができる漢字が少ないため解答欄にはひらがなが多く並びます。加えて、その字の形が整っていないためにTさん自身も読めなくなる字もあるのです。自分が書いた文字が読めないということは、受験ではとても不利になります。つまり、このままだと、記述式のテストでは採点されない可能性があるということです。パソコンを用いてテストを受けることができれば、書体の影響によるマイナスはなくなるはずです。そして、自分の知識や考えを相手にわかるように表現することができるはずです。しかし、パソコンが使えるという環境があればそれでよいかというと、そのようなことはありません。パソコンを使うことができるようにするためには、タイピング技術を持つことが求められるのです。そのための練習が必要になってくるのです。

また、並行して、大学入試において高校で行ってきた配慮が認められるように取り組みを進めていく必要があります。読み上げによる配慮が、Tさんの問題理解にどの程度効果があるのか等を検証し、根拠を示した上で合理的配慮につなげていく必要があるということです。

また、ノートについては、自分で書いている文字を認識できないため、復習や家庭学習には使えていないという事実があります。ノートづくりは大切であるため、パワーポイントを用いてノートが作れないか試行しているところです。そこで、校内でのiPadの日常的な利用についても検討がなされています。まだ、ICT導入には課題もあるが、Tさんにもたらす効果とともに教員の負担軽減にもつながるのではないかと期待されるのです。

担任は学習方法やアプリなど、使えそうなものはTさんに提示していますが、Tさんにとって使いにくいものもあります。成果をもたらすものは最新のICT機器の活用ではないこともあります。単語帳のように、書くのは大変だろうと避けそうな方法が成果をもたらすこともあり、教員の先入観で判断することは避けなければなりません。

ここに示してきた実践は、成功体験はやる気と結果を生むいいサイクルのきっかけになるということを教員が実感したことに意義があるのではないかと思います。また、担任だけでなく他の教員との協力体制と周囲の生徒の理解が重要であることもわかってきました。これは支援を必要とする生徒でなく、全ての生徒に当てはまることであると思います。この学校に入ってきた生徒の夢をかなえることができる実践を今後も積み重ねていくことが重要なのです。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

((著書))

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）、クラスルームコミュニケーション（こころリース出版社）、自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（EPワフメント研究所）など